Japanese Association of Educational Psychology

40 Japanese Journal of Educational Psychology, 1991, 39, 40—46

青年期の身体に対する男らしさ・女らしさの認知

柴 田 利 男* 野辺地 正 之*

THE COGNITION OF MASCULINITY-FEMININITY OF ONE'S OWN BODY IN ADOLESCENCE

Toshio SHIBATA AND Masayuki NOBECHI

In the present study, gender body-image was defined as the cognition of masculinity or femininity of one's own body. The purpose of this study was to investigate the structure of gender body-image and its relationship with body-satisfaction and gender role orientation in adolescence, based on the above definition. 101 male and 123 female undergraduates completed the questionnaire. As a result, it was first found that most of the body regions were representable in both male masculinity and female femininity. Secondly, it was shown that gender body-image reflected physical sex differences and stereotypical of gender role. Thirdly, various sex differences obtained suggested that the structure of gender body-image was different between the two sexes. Fourth, it was found that gender body-image had a highly positive relationship with body-satisfaction. Finally, in females, gender body-image had a positive relationship with both masculine and feminine role orientation, but in males, had a positive relationship only with the masculine role orientation.

Key words : gender body-image, masculinity-femininity, gender role, adolescence.

問　　題

青年期の身体発育は，性的成熟という質的変化を伴ない，かつ本人に自覚的に認知され経験されるものであり，それは単に大人になるというだけでなく，男あるいは女になるということを意味する。それだけに，この身体的変化は，青年に大きな心理的影響を及ぼすものと考えられてきた。つまり量的・質的な身体の変化は，子どもの身体にもとづいて形成された身体像と現実の身体との間にズレを生じさせ，そのズレを認知することで引き起こされる身体像の混乱は，それまでの子どもの自己像の混乱をもたらすものと考えられる。その一方で，この身体的変化は，身体的性差が明確となり，自らの身体が大人の男(女)としての身体に近づきつつあることに気づくことを通して，青年に自らの性別についての自覚や，大人になるという自覚をもたらし，新しい自己を形成する契機になると考えられるのである。そのため青年期は，身体の急激な変化を通して，子どもから男(女)としての大人になる時期といえよう。したがって，変化した(しつつある)身体に対応して，自らの身体像を男あるいは女としての成人の身体像に再構成するということが，青年期の重要な課題となる。

小此木・及川 (1981) は，このような性的成熟に対応して再構成される身体像を性別身体像 (gender body-image)とよんでいる。彼らは，青年期における性同一性 (gender identity) の発達を，性別身体像の形成，性役割 (gender role) の学習，異性との交流能力の発達という3つの側面から考察している。その中で性別身体像は，生物学的性(sex)と最も密着した自己像である中核性同一性 (core gender identity) が，第2次性徴にともな

* 同志社大学 (Department of Psychology, Faculty of Letters, Doshisha University)

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

い再構成されたものであり，大人の男(女)としての自己表象(self-representation)を意味するとされている**。

一方，身体像研究においても，性別身体像と同様，性的成熟にともなって再構成される身体像が，大人の男(女)としての自己の中核になるという視点からの理論的考察がなされている。野辺地(1964)は，青年期の身体発育は青年に大人の身体をもたらし，これに自己の身体像を結びつけ受容することを基礎にして，青年は大人の社会的役割を受容してゆくことができるとしている。ここで大人の身体とは必然的に男(女)としての身体である。また Fisher(1970, 1973)は様々な身体像指標にみられる性差の検討から，自分の身体をその人に要求される性役割に応じた男らしさや女らしさを身につけているものとして経験できることが，自己の同一性や対人関係に大きな影響をあたえるとしており，身体自体に対する男らしさ・女らしさの意識を問題にしている。小此木・及川(1981)は性別身体像を，性役割の学習，異性との交流能力の発達とは独立に扱っているが，これらの見解は，性別身体像と性役割の学習および異性との交流能力の発達との，相互の関連性の存在を示唆している。したがって性別身体像は，大人の男(女)としての自己の存在の基盤，自己像の中核であると同時に，性役割の学習や対異性行動にも影響を与える，まさに青年期の性同一性発達の基盤として位置づけることができよう。しかしながら，これらの見解は，いずれも理論的考察に留まっており，性別身体像に関する実証的研究はなされていない。

このような点をふまえて，本研究では性別身体像を次のように定義する。性別身体像とは，性的成熟による身体的変化の認知を基礎にして形成される身体像の一側面であり，それは自己の身体がどの程度男らしいか，あるいは女らしいか，ということについての認知を意味する。この定義にもとづき，青年期における性別身体像の構造と，その性役割意識との関連性について検討することが，本研究の目的である。

これまでの身体像研究では，様々な身体像指標にみられる性差を説明するために，身体に関連する男らしさ・女らしさが言及されている。たとえば身体サイズの評価に関して，Jourard & Secord(1954, 1955)は，女子はより小さいサイズを，男子はより大きいサイズを好むことを報告した。また Nash(1958)は男子青年に様々な身体部位を男性的か女性的かに分類させた結果，大きい身体部位(頭，腕，背中など)ほど男性的と評価されやすいことを見出した。これらの研究から Fisher(1973)は身体について，男性は男らしさを大きいことに，女性は女らしさを小さいことに同一視していると結論づけている。身体の評価に関する研究でも，Secord & Jourard(1953)は身体満足度にみられる性差を，身体が果たす社会的役割の違いによるとしている。また SD 法を用いた Kurtz(1969)の研究では，男子は女子より身体の力能性，活動性が高く，女子は男子より評価性が高く，身体に対する評価的態度が分化しているという結果が，性役割意識の反映であると解釈されている。身体満足度については，斉藤(1985)は，青年前期における性役割意識との関連性を報告しており，柴田(1990)は，対人行動との関連を調べた結果から，身体満足度には自己の男らしさ・女らしさに対する満足感が反映されている可能性を示唆している。

これらの先行研究を概観するかぎりでは，自己の身体を大きく，強く，活動的であると認知している男子は自己の身体をより男らしいと感じ，小さく，魅力的と認知している女子は自己の身体をより女らしいと感じているというように，性別身体像が，何らかの身体特性の認知と関連性をもつことが推察される。また身体の受容度を示す身体満足度に，性別身体像が大きな影響を与えていることが推察される。しかし，これらの研究はいずれも，性差を事後的に解釈したものにすぎず，それも男性の自己の身体に対する男らしさの認知と，女性の自己の身体に対する女らしさの認知が，それぞれどのような内容をもち，男女間でどのように異なっているのか，またそれらが性役割意識とどのように関連しているのか，といった基本的な知識もないままに，身体像の性差の説明に用いられているのが現状である。さらに，身体像にみられる性差を，すべて性別身体像との関連で解釈することには無理がある。たとえば Fisher(1970)は女子は男子より身体意識が安定しており身体毀損に対する不安が低いという性差を，月経などの身体機能の差違から生じる経験の違いによるものと解釈している。このように，性別身体像とは別の視点からの解釈が可能であるような性差も存在するのである。したがって，まず性別身体像の構造を，

** 小此木・及川(1981)は，内分泌学，性科学の知見にもとづき，sex に性，gender に性別という訳語をあてており，gender role を「性別役割」，gender identity を「性別同一性」と表記している。しかし心理学において，これらの用語法は一般的なものではなく，内容的にも心理学で用いられている「性役割」および「性同一性」とほぼ対応すると考えられるので，本論文においては，「性役割」，「性同一性」に統一した，なお gender body-image については，対応する訳語がないので，小此木・及川(1981)にしたがい，「性別身体像」とした。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

実証的に明らかにする必要があろう。そこで本研究では性別身体像について，身体の男らしさ・女らしさが，青年にどのように認知されているのか，またどのような身体特性の認知と結びついているのか，を明らかにしたうえで，身体満足度ならびに性役割意識との関連性について検討することにする。なお性役割意識の指標としては，身体満足度との関連性が報告されている（斉藤, 1985, 1987），性役割の自己評価をとりあげることにする。

ところで様々な身体領域のすべてについて，男らしさ・女らしさの程度を問題にし得るとは考えにくい。おそらく男（女）であることを特徴づける領域とそうでない領域が存在するものと思われる。従来は，主に精神分析理論や臨床経験にもとづいた経験的分類がなされてきた。たとえばMaClelland & Watt (1968) は，肩，背中，指，手，体毛などを男性性領域に，顔，尻，脚などを女性性領域に分類している。これに対し実証的分類を試みたNash (1958) では，指，手が女性性領域に，脚が男性性領域に分類されるなど，結果が一致しない部分も多い。そのため本研究では性別身体像を検討するにあたり，青年自身にとって男らしさ・女らしさの程度が問題となり得るような身体領域を特定することから始めることにする。

以上まとめると，本研究で検討する点は以下の3点である。

(1)青年自身が，男（女）であることを特徴づけると考えている身体領域を特定する。

(2)青年がそれらの領域に男らしさ・女らしさをどの程度認知しているか，また男らしさ・女らしさの認知が，どのような身体特性の認知と関連性をもっているか，について検討することによって，性別身体像の構造を明らかにする。

(3)性別身体像と身体満足度および性役割の自己評価との関連性について検討する。

方　法

被験者

大学生男子101名（20—23歳），女子123名（20—22歳），計224名。

調査方法

教室において質問紙を配布し，1週間の期限内に所定の場所（心理学実験室）に提出させた。

調査内容

①身体に対する男らしさ・女らしさの評定　Secord & Jourard (1953) の Body-Cathexis Scale を参考にして，身体の外観や部分を表わす21個の項目を選定した（TABLE 1）。各々の項目について，1)一般にどの程度男らしさを表わすと思うか，2)一般にどの程度女らしさを表わすと思うか，3)自分自身の身体がどの程度男らしい，あるいは女らしいと思うか，をそれぞれ7段階で評定するよう求めた。

②身体特性の認知　SD法を用いた。あらかじめ予備調査を行い，自由記述により身体を表現する形容詞を収集した。ここから出現頻度の高いものを選出し，井上・小林 (1985) を参考に9つの形容詞対を構成した（TABLE 3）。これを用い，①と同じ21個の各々の項目について，7段階で評定するよう求め，項目ごとに各形容詞対の左側の形容詞から右側の形容詞に7点から1点を配点した。

③身体満足度　①と同じ21項目について，満足している程度を，1点（非常に不満である）から7点（非常に満足している）の7段階で評定するよう求めた。

④性役割の自己評価　伊藤 (1986) の性役割測定尺度（ISRI）を用いた。ISRIは作動性（行動力のある，積極的な，など11項目），共同性（思いやりのある，暖かい，など7項目），美（おしゃれな，かわいい，など3項目），繊細さ（細やかな，繊細な，など3項目），の4つの下位尺度，全24項目から成る尺度である。作動性は従来の男性性を，美および繊細さは従来の女性性を，共同性は男性・女性に共通の人間性を表わす特性と解釈されている。この24項目について，自分にどの程度あてはまるか，を1点（全くあてはまらない）から7点（非常にあてはまる）の7段階で評定するよう求めた。なお伊藤 (1986) では，美と繊細さは1つの因子としてまとめられているが，予備調査において役割期待および実現度について評定を求め，男女別に因子分析を行った結果，両者は独立の因子として抽出されることが多かった。よって本研究では，美と繊細さを各々独立の因子として扱うことにする。

結　果

(1)身体に対する男らしさ・女らしさの評定

身体が男らしさ・女らしさを表わす程度についての，各身体領域ごとの評定平均値と，その領域が男らしさ・女らしさを表わす程度の差について，男女別にt検定を行った結果がTABLE 1である。男女ともに，男らしさより女らしさをより表わす，と評定しているのは髪，顔全体，腰，目，脚，胸，尻の7項目，女らしさより男らしさをより表わす，と評定しているのは背中，身長，体毛，腕，肩の5項目であった。また性器に対しては，男子は男らしさを，女子は女らしさをよ

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

り表わすと評定していた。その他，手，足，体重，胴，歯，体型の6項目は，女子においてのみ，男らしさよりも女らしさをより表わすと評定されていた。鼻と歯は，男子においても女子においても，男らしさ・女らしさの評定平均値がいずれも尺度中央値である4以下であり，また女子の女らしさの評定において，体毛の評定平均値が4以下であった。よってこれらの身体領域は，男子の身体の男らしさ，女子の身体の女らしさを表わすものではないと考え，以下の分析から除外した。

TABLE 1　身体が男らしさ・女らしさを表わす程度

	女子			男子		
	男らしさ 平均(SD)	女らしさ 平均(SD)	t 値	男らしさ 平均(SD)	女らしさ 平均(SD)	t 値
髪	3.99(1.61)	6.10(0.94)	12.94***	4.43(1.37)	6.31(1.00)	11.67***
顔全体	5.03(1.55)	5.60(1.11)	4.04***	5.23(1.16)	5.55(1.21)	2.87**
腰	3.85(1.44)	5.87(0.88)	14.34***	4.09(1.18)	5.94(1.22)	10.79***
背中	5.49(1.60)	4.41(1.25)	5.43***	5.39(1.39)	4.27(1.32)	6.75***
鼻	3.72(1.23)	3.82(1.19)	0.77	3.54(1.21)	3.51(1.25)	0.09
身長	5.20(1.68)	4.11(1.33)	5.21***	5.22(1.21)	4.23(1.31)	6.49***
体毛	5.11(1.52)	3.20(1.49)	8.43***	5.23(1.16)	3.04(1.57)	11.16***
腕	5.44(1.49)	4.54(1.29)	4.61***	5.84(1.02)	3.99(1.43)	12.32***
手	4.85(1.55)	5.54(1.13)	4.29***	4.99(1.19)	5.04(1.36)	0.39
目	4.11(1.54)	5.07(1.40)	7.05***	4.74(1.37)	5.06(1.51)	2.55*
肌の色	4.56(1.66)	4.67(1.35)	0.68	4.88(1.46)	4.73(1.51)	1.09
脚	4.58(1.53)	5.59(1.05)	6.95***	4.79(1.19)	5.55(1.43)	4.39***
足	3.76(1.60)	4.10(1.54)	2.11*	4.11(1.33)	4.21(1.47)	0.70
体重	3.96(1.36)	4.28(1.18)	2.37*	4.20(1.18)	4.26(1.44)	0.81
胴	3.85(1.40)	4.82(1.19)	5.98***	4.42(1.27)	4.37(1.37)	0.07
歯	3.19(1.34)	3.46(1.38)	2.05*	3.69(1.39)	3.82(1.51)	1.39
体型	5.37(1.77)	5.79(1.23)	2.94**	5.84(1.06)	5.98(1.24)	0.60
胸	4.74(1.72)	6.06(1.14)	8.17***	5.49(1.07)	6.24(1.24)	4.92***
尻	4.16(1.64)	5.84(0.96)	10.24***	4.58(1.14)	5.98(1.26)	9.25***
肩	5.42(1.60)	4.72(1.39)	3.50***	5.63(1.00)	4.27(1.37)	8.91***
性器	5.04(1.86)	5.46(1.29)	2.40*	6.11(1.13)	5.34(1.62)	3.09**

* p<.05　** p<.01　*** p<.001

(2)各身体領域に対する男らしさ・女らしさの認知

女子の鼻，歯，体毛を除いた18項目に対する女らしさの自己評定，および男子の鼻，歯を除いた19項目に対する男らしさの自己評定の平均値と標準偏差をTABLE 2に示す。自己の身体に対する男らしさ・女らしさの認知が各身体領域によってどのように異なるかを調べるために，男子別に1要因分散分析を行ったところ，男女ともに有意差がみられた（女子：$F(17,2074)=11.06$，$p<.001$；男子：$F(18,1800)=6.83$，$p<.001$）。Newman Keulsの法により多重比較を行った結果，女子では，女らしさの自己評定値に，性器≧髪≧胸，尻，腰＞体型，肌の色，胴，肩，腕，脚，足，体重，という有意な差がみられた。また男子では，男らしさの自己評定値は，性器において最も高く，その他，背中，脚，髪＞体重，胴，という有意な差がみられた。

TABLE 2　各身体領域に対する男らしさ・女らしさの認知

	女子	男子
	女らしさの認知 平均 (SD)	男らしさの認知 平均 (SD)
髪	5.15(1.31)	4.72(1.10)
顔全体	4.63(1.20)	4.58(1.07)
腰	4.97(1.07)	4.32(1.33)
背中	4.57(1.08)	4.74(1.12)
身長	4.72(1.17)	4.35(1.45)
体毛	――	4.52(1.25)
腕	4.34(1.43)	4.61(1.31)
手	4.74(1.57)	4.43(1.26)
目	4.62(1.11)	4.59(0.98)
肌の色	4.44(1.44)	4.34(1.22)
脚	4.27(1.46)	4.74(1.31)
足	4.18(1.29)	4.68(1.22)
体重	4.16(1.42)	4.22(1.39)
胴	4.36(1.43)	4.14(1.32)
体型	4.47(1.53)	4.47(1.48)
胸	5.01(1.58)	4.48(1.47)
尻	4.99(1.29)	4.41(1.19)
肩	4.35(1.53)	4.67(1.47)
性器	5.38(1.48)	5.34(1.49)

(3)身体の男らしさ・女らしさと結びつく身体特性

身体に対する男らしさ・女らしさの認知が，どのような身体特性の認知と結びついているかを検討するために，男子の男らしさの自己評定値（19項目の合計値）と女子の女らしさの自己評定値（18項目の合計値）を目的変数，9つの形容詞対の評定値（男子は19項目，女子は18項目の合計値）を説明変数とする，ステップワイズ方式による重回帰分析を男女別に行った（変数の選択基準は，$p<.10$）。これらの変数の平均値と標準偏差をTABLE 3に，重回帰分析の結果をTABLE 4およびTABLE 5に示す。なお形容詞対の評定に欠損値のあった，男女各1名をこの分析から除外した。よって，この分析の被験者数は男子100名，女子122名である。

TABLE 3　各身体特性および男らしさ・女らしさの認知

変数	女子 平均 (SD)	男子 平均 (SD)
はげしい ― おだやかな	64.41(11.44)	75.40(11.81)
やわらかい ― かたい	83.14(11.08)	75.34(12.23)
うつくしい ― みにくい	71.80(11.44)	74.93(11.83)
ちいさい ― おおきい	68.18(11.47)	71.20(12.77)
げんきな ― つかれた	82.08(11.30)	81.91(15.18)
よわい ― つよい	67.02(9.21)	71.10(13.92)
よい ― わるい	74.25(11.71)	79.25(12.62)
動的な ― 静的な	77.11(10.96)	81.05(12.78)
おとっている ― すぐれている	72.40(10.54)	75.21(11.16)
女らしさの認知	83.35(13.53)	――
男らしさの認知	――	86.33(16.09)

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

TABLE 4 身体に対する女らしさの認知についての重回帰分析（女子）

変　　数	偏回帰係数	標準偏回帰係数
はげしい―おだやかな	−.245	−.207
やわらかい―かたい	.236	.193
うつくしい―みにくい	.516	.436
ちいさい―おおきい		
げんきな―つかれた	.175	.146
よわい―つよい		
よい―わるい		
動的な―静的な		
おとっている―すぐれている		
CONSTANT	28.108	

$R^2 = .551$

TABLE 5 身体に対する男らしさの認知についての重回帰分析（男子）

変　　数	偏回帰係数	標準偏回帰係数
はげしい―おだやかな		
やわらかい―かたい	−.247	−.188
うつくしい―みにくい		
ちいさい―おおきい		
げんきな―つかれた	.281	.265
よわい―つよい	−.243	−.210
よい―わるい		
動的な―静的な		
おとっている―すぐれている	−.536	−.372
CONSTANT	139.494	

$R^2 = .729$

その結果，男女ともに4変数が基準を満たして選択された。女子では重相関係数は.743（$F(4,118) = 36.25$, $p < .001$），男子では重相関係数は.854（$F(4,96) = 64.68$, $p < .001$）であった。標準偏回帰係数をみると女子では，美しい，やわらかい，おだやかな，元気な，という身体特性を認知しているほど，より女らしさを認知している。男子では，強い，優れている，かたい，元気な，という身体特性を認知しているほど，より男らしさを認知している。

(4)身体満足度および性役割意識との関連性

女子の女らしさの自己評定，男子の男らしさの自己評定と，身体満足度（男子は19項目，女子は18項目の合計値）および性役割の自己評価（下位尺度ごとの合計値）との間の相関係数をTABLE 6に示す。男らしさ・女らしさの認知と身体満足度の間には，高い正の相関がみられた。また女子の女らしさの認知は，性役割のすべての下位尺度と正の相関をもつが，男子の男らしさの認知は，男性性と関連する下位尺度との間にのみ正の相関がみられた。

TABLE 6 身体に対する男らしさ・女らしさの認知と身体満足度および性役割の自己評価との相関

	女　子	男　子
	女らしさの認知	男らしさの認知
身体満足度	.584***	.677***
性役割の自己評価		
作動性	.333***	.543***
共同性	.396***	.309**
美	.482***	.180
繊細さ	.282**	.080

* $p < .05$　** $p < .01$　*** $p < .001$

考　　察

本研究では性別身体像を，身体に対する男らしさ・女らしさの認知であると定義し，青年後期の大学生を対象に，その構造ならびに身体満足度・性役割の自己評価との関連性について分析を行った。

まず男（女）らしさよりも，女（男）らしさをより表わすと認知されている身体領域は，男女間である程度共通しているが，女子の方が，女らしさをより表わすと認知されている領域が多かった。これらの領域は，女らしさを表わす腰，胸，尻，体型，男らしさを表わす体毛，腕，肩，その両方を表わす性器など，青年期の身体発育によって性差が顕著となる領域，あるいは外観上の性的特徴を示す領域と解釈できる。また本研究では，Nash (1958) や McClelland & Watt (1968) が身体領域を男性的か女性的かに2分しているのに対し，青年自身に男らしさ・女らしさの両方について一般にどの程度表わすかをたずね，それを比較するという方法をとった。その結果，女子にとっての女らしさと，男子にとっての男らしさだけに注目した場合，ほとんどの領域で，評定平均値が尺度中央値以上であり，いずれの領域も女子の女らしさと男子の男らしさの両方を表わしうるものと考えられる。つまり身体の男らしさ・女らしさを問題にする場合，特に重要な意味をもつ身体領域は存在するが，その他の領域もまた，男女間でそれぞれ異なった意味をもって，身体の男らしさ・女らしさに関連しているのであろう。したがって，

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

Nash (1958) や McClelland & Watt (1968) のように，さまざまな身体領域を男性性領域か女性性領域かに，二者択一的に分類するべきではないといえよう。

これらの領域に対する男らしさ・女らしさの自己評定の平均値は，男女ともに，すべての領域で尺度中央値以上を示しており，男らしさ・女らしさが認知されている。しかし領域ごとの認知のされ方には，男女間で相違がみられる。男(女)らしさをより表わすと評定されている領域は，性別身体像において，特に重要な意味をもつ領域と考えられるが，多重比較の結果をみると，女子では，そのような領域間において，女らしさの認知に有意な差がみられた。つまり女子は，女らしさを特徴づける重要な領域に対して，女らしさの認知が分化していると考えられ，男女ともに女らしさをより表わすと評定されている領域よりも，女子においてのみ女らしさをより表わすと評定されている領域に対して，女らしさの認知が低いという傾向がある。一方，男子では，性器に対する男らしさの認知が最も高いということを除いて，男らしさをより表わすと評定されている領域間に，有意な差はみられなかった。また Fisher (1986) は，身体像の構造に対する性器的な差違の直接の影響はほとんどなく，むしろ社会化の影響が顕著であると論じている。しかし性別身体像に関しては，男女ともに性器において，男らしさ・女らしさが最も高く認知されていることからみても，両性間の性器的差違の認知が与える影響は無視できないものと思われる。

次に，このような男らしさ・女らしさの認知に，どのような身体特性の認知が関連性をもつのか，ステップワイズ法による重回帰分析を用いて検討した。その結果，男女ともに4変数が選択され，説明率は女子で55.1%，男子で72.9%とかなり高いものであった。選択された形容詞対の中で，男女共通のものは“元気な—疲れた”と“やわらかい—かたい”の2つであった。標準偏回帰係数の正負の方向は，先行研究から推察されるものと一致している。しかし，身体サイズの評価にみられた性差から推察された“大きい—小さい”という特性は，男らしさ・女らしさの認知に寄与していなかった。これは，この分析が身体全体についての特性と男らしさ・女らしさの認知をあつかったために生じた結果であると思われる。おそらく男女ともに，ある領域では大きいことが，別の領域では小さいことが，男らしさ・女らしさの認知と結びついているのであろう。選択された変数の中では，男女ともに“元気な”という特性が男らしさ・女らしさの認知に寄与している。これは身体が正常に機能しているかどうかという，最も基本的な身体特性を意味する。その他，女子では“やわらかい”，“おだやかな”，男子では“かたい”，“強い”という，青年期の身体発育によって明確となる身体的性差に対応した身体特性が，青年の身体に対する男らしさ・女らしさの認知に寄与している。すなわち身体が正常に機能していることを基礎として，身体的性差を明確に認知することが，性別身体像を規定していると考えられる。しかしながら，女子の“美しい”，男子の“優れている”という特性を合わせて考えれば，これらの身体特性は同時に，ステレオタイプな性役割期待に一致した身体特性を表わしているともいえよう。この点では，先に述べた Fisher (1986) の見解を支持する結果であるといえる。以上のことから，性別身体像は，青年期の身体発育にともない明確となる身体的性差と，身体に対する社会的な意味づけ(ステレオタイプな性役割期待)についての青年自身の認知のあり方を反映しているものと考えられる。

身体満足度との関連性については，男女ともに高い正の相関がみられたことから，身体を男(女)らしいと認知しているかどうかということは，身体満足度を決定する重要な要因であり，従来の研究で報告されている身体満足度の性差は，性別身体像による部分が大きいと考えられる。また性別身体像と性役割の自己評価の関連性については，男女間で異なった傾向がみられた。男子は，身体を男らしいと認知しているほど，自己の男性役割を高く評価している。これに対し，女子は，身体を女らしいと認知しているほど，自己の男性役割と女性役割の両方を高く評価している。このような関連性の相違がなぜ生じるのかについて，本研究の結果から明確な結論を出すことはできない。青年期の性役割認知の研究によれば，男子が男性役割を自己の理想として認知するのに対し，女子はさまざまな混乱をへて，両性具有的な理想像を持つにいたるという知見が得られている(伊藤・秋津, 1983；山口, 1985)。これと考え合わせれば，性別身体像は，青年が理想とする性役割を身につけているという意識と関連をもつと解釈できるかもしれない。しかし，これは推論の域を出るものではなく，今後の検討を待たねばならないであろう。

以上述べてきたように，本研究では，青年期の性同一性の一側面である性別身体像について，実証的検討を試みた。その結果，身体に対する男らしさ・女らしさの認知のされ方にも，それと結びつく身体特性の認知にも，また性役割の自己評価との関連性にも，男女

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

間で相違がみられることから，性別身体像は，男女それぞれに固有の構造を有するものと考えられる。また身体的性差の認知および身体に対するステレオタイプな性役割期待を反映していること，性役割の自己評価とも関連をもつこと，さらに身体像が自己の中核であることを考えるならば，青年期の性的成熟を基礎とする身体像の一側面である性別身体像は，男性と女性それぞれの性同一性の中核として機能しているのではないかと思われる。今後は，性別身体像の形成に関わる諸要因，たとえば第2次性徴の発現時期，それに対する心理的反応，他者の身体の認知，両親や友人からの評価などに関する検討が必要であろう。

引用文献

Fisher, S. 1970 *Body experience in fantasy and behavior*. New York : Appleton-Century-Crofts.

Fisher, S. 1973 *Body Consciousness : You Are What You Feel*. New Jersey : Prentice-Hall, Inc. (村山久美子・小村啓 訳 1979 からだの意識 誠信書房)

Fisher, S. 1986 *Development and structure of the body image*. Vol. I & II. New Jersey : Lawrence Erlbaum Associates, Inc., Publishers.

井上正明・小林利宣 1985 日本におけるSD法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観 教育心理学研究, **33**, 253—260.

伊藤裕子 1986 性役割特性語の意味構造—性役割測定尺度(ISRI)作成の試み— 教育心理学研究, **34**, 168—174.

伊藤裕子・秋津慶子 1983 青年期における性役割観および性役割期待の認知 教育心理学研究, **31**, 45—50.

Jourard, S.M. & Secord, P.F. 1954 Body size and body-cathexis. *Journal of Consulting Psychology*, **18**, 184.

Jourard, S.M. & Secord, P.F. 1955 Body-cathexis and the ideal female figure. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **50**, 243—246.

Kurtz, R.M. 1969 Sex differences and variations in body attitudes. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **33**, 625—629.

McClelland, D.C. & Watt, N.F. 1968 Sex-role alienation in schizophrenia. *Journal of Abnormal Psychology*, **73**, 226—239.

Nash, H. 1958 Assignment of gender to body regions. *Journal of Genetic Psychology*, **92**, 113—115.

野辺地正之 1964 自我—その形成と変容 峯書房

小此木啓吾・及川卓 1981 性別同一性障害 (gender identity disorder) 現代精神医学体系8—人格異常・性的異常 中山書店 233—273.

斉藤誠一 1985 思春期の身体発育と性役割意識の形成について 教育心理学研究, **33**, 336—344.

斉藤誠一 1987 女子青年における性役割意識と身体意識について 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 616—617.

Secord, P.F. & Jourard, S.M. 1953 The appraisal of body-cathexis : Body-cathexis and the self. *Journal of Consulting Psychology*, **17**, 343—347.

柴田利男 1990 青年期の身体満足度が対人不安および自己開示行動に及ぼす影響 心理学研究, **61**, 123—126.

山口素子 1985 男性性・女性性の2側面についての検討 心理学研究, **56**, 215—221.

(1990年4月11日受稿)

NII-Electronic Library Service